
輪廻転生

坂本ヒロノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻転生

【Nコード】

N2404B

【作者名】

坂本ヒロノリ

【あらすじ】

輪廻転生。それは生の螺旋。無限に続く命を積み重ねる工程。罪には罰を、生には死を相反する二つの事柄をお互いに内包し、紡ぎ続ける無限の階段。人の身で組み込まれれば、神と成る。ああ、なんと笑えるだろう。人の神など、汚れているにも程がある。輪廻転生。それは、神と人の物語。

プロローグ

紅き血は、己を表している。
人の身は儚く、脆い。

強さを求めた。手を伸ばした。

求めた力は、遠い所で見ているだけだった。

ただ、その死に様を楽しんでいるように。

第1話

…昔の夢を見た。

ただ、紅かった。

一時間前までは団欒の場所だった居間はその在った光景を否定するように破壊されていた。

…いや、破壊、なんて生温い。

もはやこの居間は、あの微笑ましい家族は、この世から滅失された。

オレは、あの時のまま、その光景を黙って傍観しているだけだった。

居間に『何か』が入ってきてから、オレを除いた家族は立ち上がった。父親は刀、母親は槍、姉は手甲を携えて、オレを囲むように背中を預けた。

その光景に違和感を覚えなかったといえは嘘になる。だけど、その言葉には逆らってはいけないと本能でわかっていた。

「祐季、目を開けるな」

父は、今までに聞いたことのない殺意の塊のような声だった。

オレは父の言葉に従い目を閉じた。

途端。

グシャ メキボキ バタタッ

「が…あ…？」

姉の声と、あれはきつと『死』の音が聞こえた。
何かを振るう音がして、

「あつ…！」

今度は母の声。

「ちくしょおお！」

父が吠える。オレの側から離れる気配がして恐怖でオレは目を開けてしまった。

ただ、紅かった。

姉は胸に不自然な窪みがあった。

母は左肩から右脇腹にかけて体を二つに両断。

そして父は、

「

」

無言のまま、胸を貫かれていた。

月を背に立つ、異形の化け物に。

「……」

無言で後ずさる。

月を背に立つそいつは、あまりに不釣り合いで吐き気がする。

「逃げるか…まあそれもよからう。だが、老いた体はまずいものだな。残り香だけで吐き気がする。そうだな…」

何故か、その言葉がひどく癪に触った。

体が走る。

あいつとの間合いは5メートル。この距離なら一秒必るか必らないか。

…何度も見た光景。けど自らを止めようとすることができない。
この先を知っていてもなお、それは変わらなかった。

残り1メートル。アイツは動かない。オレは拳を振り上げた。

「止めぬか、只の足掻きは実に見難い。だがその勲章として」
アイツの姿が掻き消える。それを頭が理解する前に、

「その左腕、貰い受けよう」

左腕の、肘から先が食い千切られた感覚だけが脳に届いた。

バランスを崩して後頭部から壁に激突した。

脳が揺れて、意識が飛びかける。そんな状態でも意識は飛ばず、
失しなつた左腕から冷たくなる感覚が恐ろしくて、泣きたかった。

力があれば…こうはならなかった。力が…欲しい。

残った腕を伸ばす。

腕は力なく振るえ、今に崩れ落ちそうだった。

「まだ生きているか…僥倖、とでも言おうか。命拾いしたな小僧。
貴様の顔、覚えておくぞ。」

アイツはそう言って、消え去った。

窓の外はさっきまでの月は沈み、再び上がってきた太陽が眩しく
周囲を照らしていた。オレはその光景を見て、自分の容態を忘れて、
眠りについた。

そう、今まで何度も見た夢。

哀しくて、寂しい夢だけど、現実味が無い夢。

第2話（前書き）

書き始めましたけど、核心へはまだまだ遠そうです。

第2話

…窓から差し込む朝日が眩しい。

どうやら今朝は夢と朝日の影響で目が醒めたらしい。

時計の針が指し示す時刻は七時五分。いつもより十分ばかり早いことになる。

「さて、どうするか」

十分という時間を有効に使う方法を考え始めたが、そういう考えが浮かぶという時点で既にしっかりと睡眠は取れているわけで、これ以上眠りは必要ないはずだ。

そうと決まれば行動は早い。寝間着を脱いで制服に着替え、布団を畳んで一階に降りる。まずは朝食を摂らなければ。

台所には先客がいた。

「あれ？今日はいつもより早いですね」

調理場から包丁の野菜を刻む音と共に、鈴鹿の声が聞こえてくる。

「ああ、悪い夢を見ちまって、それで起きたんだよ」

返事をして椅子に架ける。食卓には既に二人分のおかずが用意されていた。

ほつれん草のゴマ合えにだし巻き卵、キッチンから味噌の香りが漂ってくるということはこれに味噌汁も加わるらしい。

「ふう…」

朝の何気ない風景にホッと胸を撫で下ろす。

いくら夢とはいえ、あんな惨劇を間近に見てしまったのは何とも後味が悪い。そんな光景を見て、今の平和が揺らがないものとして在ることに心底感謝する。

「お待たせ、今日は豆腐とワカメの味噌汁です」

鈴鹿は味噌汁の入った鍋ごとこっちに持ってきた。手際よく二人分注ぎ分けると、片方をオレの前に置いた。

「それじゃあ、食べましょうか」

「そうだな、冷めたら料理にも鈴鹿にも申し訳ない」

朝食を両親に代わって作っていた人物は雁宮鈴鹿。オレの実の妹で、高校一年生。見た目は相当な美人で、内面もその外見に相違ない、オレの誇れる妹である。

「鈴鹿、昨日遅くまで何やってるかと思ったら、いりこでダシ取ってたんだな」

「あ、うん。兄さんが前に作ってくれた時に美味しかったから作ってみたんだけど…」

あくまで鈴鹿は謙虚な姿勢を崩さない。

「完璧だぞ。ついに鈴鹿も一人前だな」

オレは味噌汁のおかわりを要求する。鈴鹿はおかわりを注ぎながら微笑んだ。

「いいえ、兄さんにはまだまだ及びません」

鈴鹿の黒くて長い髪が揺れる。その不意打ちな鈴鹿の艶やかさに思わず目を奪われてしまう。

「兄さん…?」

鈴鹿は味噌汁椀片手に不思議そうにオレを見ている。

「な、なんでもない。なんでもないから気にしないでくれ」

「…?」

なんだかとても気恥ずかしいので、二杯目の味噌汁を思い切りかき込んだ。

第3話（前書き）

長くて埋まらないですね（汗）

第3話

…そういえば、鈴鹿が両親の代わりに朝食を作り始めてもう一年ほど経つ。

オレ達の両親は、海外に出向いてバリバリ働くお仕事の方たちなのだが、その職種が普通ではない。初めて聞いたときはオレも耳を疑った。

四年前の、雪が降る日だった。

オレが居間で鈴鹿と話していると、いつもと変わらない様子でオレに親父が話しかけてきた。

「祐季。少し、いいかな」

「ん？いいけど、どうしたんだよ急に」

親父は少し困った顔をして、小声で言った。

「鈴鹿に聞かれたら困るんだ。外で話そう」

「外って…雪降ってるぞ」

外の雪は日が落ちてますます質量を増していた。

雪だるまに換算するなら軽く10体は生み出すことが出来ただろう。

「大丈夫。寒くないから」

親父は笑っていた。

そのことはあまり腑に落ちなかったが、嘘をついたことがない親父がこんなことで嘘を言うとは思えなかったし、何より鈴鹿に隠すようなことを話すと言っただ。

「じゃあ、行こう」

「ああ、なるべく手短に話すから、寒くなくてもね」

「実は私と母さんはね、祐季や鈴鹿とは遠いところにいるんだよ」
玄関先で、親父は独り言のように言う。

「なに言ってるんだよ。ちゃんとここにいるじゃないか」

質問の意味を理解できなかったオレは、ありのままの現実を口にする。

「そういうことじゃなくてね。そう、知っていることが違う。世界の捉え方が違うって言うのかな」

「…？」

親父の話では頭がこんがらがっていただけだった。

ただなんとなく遠まわしに言っているということが分かったので、なんだかそれが子ども扱いされているようで嫌だった。

「なんだよそれ、もっと素直に言ってい。オレだってもう子供じゃないんだし」

そう言ってもらえると助かるよ。と親父は言った。

「私たちはね、魔法が使えるんだよ」

な…

「なんだよ！そ…」

一陣の風が吹いた。条件反射で腕で顔を覆うが、その風の不自然さに気づく。

「冷たく…ない？」

父親を見上げる。父親は今までに見たことのないほど、嬉しそうな顔をしていた。

「私が使うのは自然干涉の魔術が基本なんだけどね。さっきの風も初歩中の初歩みたいなもの。母さんはルーンを専攻していたらしいけど、私にはさっぱりだ」

親父の思い出深い話にも興味があつたが、今はそんなことよりも

胸の中を占拠している感情があった。

「親父…」

「どうしたんだい？祐季」

その声は、オレが口にする言葉を見越しているようだった。

「オレにも、魔法が使えるかな？」

「ああ、使えるとも」

親父は笑った。

翌日から、親父は師となり、オレは親父の弟子となった。

だが最初から実技を教えて貰えるはずもなく、当然基礎知識の勉強から入ることになった。

「何事も基礎が大事だからね」

オレが駄々をこねると、親父はいつもそう言っていた。

いくら強力な銃を持っていたても安全装置の存在を知って、それを外さないと弾は撃てない。要はそういう事らしかった。

一年ほど経つと、ようやく初歩的な魔術を教えて貰えた。体内の魔力を使用して、

『魔術』を行使する。

魔力とは例えるならば、個人の持つ精神力のようなものと親父は言っていた。

それともう一つ、魔力とは個人差はあるが誰でも持ち得るものだとも言っていた。

なので、極少量の魔力しか持たない魔術師や、体の最大容量を軽く超えている魔力を持った一般人もいるらしい。

こんな感じで、オレの魔術に対する知識は十分に養われたのだが、実技になった途端親父の表情が曇った。そして第一声が、

「まさか…ここまでとは」

うるさいやい。オレだってもう少しくまくするつもりだったさ。

親父が見よう見真似でやってみるといので、詠唱行程や術式ま

で完全に同じにし、発現させた。

「はあっ！」

気合い一発。

親父のようにはいかなくても少しぐらいの風は…！

「…」

「…」

無風。

いや、無風を通り越して静寂が訪れた。庭の木から聞こえてくる雀のさえずりがオレを馬鹿にしているように聞こえた。

「祐季、言いにくいことを言ってもいいかな」

オレはだんまりを決め込む。

それを無言の頷きと捕えたのか、親父は悲しいほどの確な追い討ちをかけてきた。

「祐季、君に魔術は向かないみたいだ」

その言葉自体が呪いのようにオレの脳髓に響き渡った。

第4話

結局。オレに扱える魔術は、体内に魔力を通して身体機能を向上させる、到底魔術とは呼べない代物だった。

でも、それだけしか出来なくても、それだけで親父に近付けたと思えた。それで十分だった。

ただ、その神秘に触れているだけで。

まあ、唯一の不満があるとするならば、オレが魔術を使えないと判断した親父がオレ達を置いて、海外に仕事に出たということぐら이다。

親父は定期的に手紙を送ってくるが、むしろそういうことをしない方がこちらとしてもよけいな心配をしなくて済む。

子供を置いていくのなら、最後まで放置しておけば楽だっただろうに、親父は優しすぎるのがいけなかったのだ。

「…柄でもないこと思いだしちまったな」「兄さん…？どうしたの？ぼうつとして」

「あ、悪い。少し親父のことを思い出してた」

「お父さんのこと？」

「鈴鹿が朝飯作ってるのを見てなんとなく。全く、かわいい子供を置いて仕事に出るか普通？」

「もう、兄さん。本人がいなかったってそんなこと言っちゃダメですよ」

鈴鹿は微笑みながらやわらかに言う。笑っているということはあながち否定出来ない所もあるらしい。

「甘やかしすぎだろ。オレは男だからまだいいけど、鈴鹿は女の子じゃないか」

ちらりと鈴鹿を盗み見る。

肩まで伸びたツヤのいい黒髪に、整った顔立ち、最近急激にその凹凸を主張し始めたボディライン。

完璧だった。

過程を通り過ぎて結果を言うと、鈴鹿はめつきり美人になっていた。

実は、鈴鹿がいつからこうなったのか全く覚えがない。意外と最初からそうだったのかもしれない。

しかし最初からそうだったとして、それを最近になって意識し始めたオレは…

いかんいかん。

心頭滅却、心は常に流水のごとき平穏を保たなければ。

「ごちそうさま」

心の中で鈴鹿に謝りながら、食器を持って席を立つ。

「はい、おそまつさまでした」

そんなことは知らない鈴鹿は屈託のない笑顔をオレに向けてくる。

…正直。グラツときた。く、くそ！あんな不意打ちされたら

どうしようも無くなっちゃうじゃないか！

「兄さん。顔赤いけど…」

「ほ、本当になんでもない！き、気にしないでくれ！」

「……」

オレのあからさまに怪しい行動に不審を抱いたのか。鈴鹿はゆっくりとオレに歩みよってきて、

「鈴鹿…さん？」

明らかに、怒っていた。

「兄さん」

「は、はい」

「熱でもあるんじゃないですか、さっきから顔が真っ赤ですけど」「あ、いや。これはだな…」

「兄さん。少し失礼します」

そう言って、鈴鹿はオレの額に手を当ててきた。

鈴鹿の手は冷たくて小さくて柔らかくて、額なんて感覚が乏しい部分に触れられているのに、心臓が爆発しそうなぐらい脈打っている。

「ちよっ！鈴鹿！」

「やつぱり…熱があるみたいです」

あ、いやこの熱は鈴鹿に触られているからなんて口が裂けても言えるかこのヤロー！「兄さん。今日は無理しないで休んだほうが」「い、いや。大丈夫だオレはなんでもない！」

「兄さん！」

ああもう、なんだって今日の鈴鹿はこんなに物分かりが悪いんだ。「兄さん！聞いてましたか？」

「悪いな鈴鹿。オレは本当になんでもないし、もしそうだったとしても、昼には治ってるさ」

「でも…」

先ほどの勢いはどこへ行ったのやら、鈴鹿は俯いて黙ってしまっただ。

「本当に悪い。今日の夕飯はオレが作るからそれで勘弁してくれ」
鈴鹿の返事を待たず、オレは家を逃げるように飛び出した。

第5話

家の敷地を走り抜ける。

走り抜けて、しばらく。頭のクールダウンも終了したので、立ち止まって空を見上げる。

空は突き抜けるように青く、冬の雲は手を伸ばせば届きそうなのに、空は背伸びすればするほど遠のいていくような気がした。

…ようやく心の方も平穏を取り戻してくれたようだ。　というか、朝のことはオレは悪くないはずだ。

そう、あれは鈴鹿が勝手にオレに近寄って来たんだからオレに非は無い。きつと無い。

無いだろうけど…飛び出す前のあの鈴鹿の顔を思い出すと、やはりオレは悪い事をしてしまったのかもしれない。

「鈴鹿に謝る方法か…」

ブツブツと呟きながら思考を巡らせていると、気付かぬ間に学校手前の交差点まで歩を進めていた。

時刻は七時十五分。

いつもより三十分早い出立なので日はまだ浅く、登校している生徒の姿も疎らだった。　って呑気に周囲を見渡している場合じゃない。

鈴鹿は普段はおしとやかで、いつも笑顔を絶やさない。

しかしその反面、怒ると感情を押し出しまくる激情家へと変貌するのだ。

その様は天使の笑顔の阿修羅そのものだった。

「ああ…なんだってあんなことしちゃったんだ」

口には出すが、既に取り返しのかからない事態まで発展していることに間違いはないので、再び謝罪方法を考えることにした。　「…」

…いかん。

どれだけ頭を捻つても鈴鹿の前で正座している自分しか見えない。

「…、…」

ふと、オレの頭に天啓が閃いた。

「夕飯…！」

そうだ、夕飯だ。

これ以上ないというぐらいいい出来の夕飯を作つて鈴鹿の機嫌を取るほかない！

「…？ん？」

となれば早速メニューを決めよう。

今は秋刀魚の脂が乗ってるのが旨いらしいから、今日は秋刀魚をメインにするか。

「の…、き…」

冷蔵庫には大根が入ってたからそれでおろしをこしらえればいい。そうしたら今度は他のおかずを…

「ゆん…」

余った大根でサラダと味噌汁が作れるから…あとは甘い物を一つ。ああ、かぼちゃもあったな。じゃああと一品はかぼちゃの醤油煮で決まり。じゃあ残ったデザートはどうするか…

「ゆきく…」

やはりここは和風に攻めるべきだろう。帰りにスーパーで和菓子を買つて行こう。

緑茶と一緒に食べたいから大福とか羊羹がいいかもしれない。

よし！これで今晚は完璧だ！

「祐季君」

「え…」

唐突に、後ろにここ一年で聞き慣れた声がした。

第6話（前書き）

今回初めて2ページ目までいきました（笑）

第6話

「香美じゃないか。おはよう」

「お…おはよう…」

今にも消え入りそうな声でそう言つと、香美はいつものように黙つてオレに並んで歩き始めた。

オレはあまり気が利いたおしゃべりをする方じゃないし、香美はなおさらだ。オレに挨拶するだけで俯いてしまつような恥ずかしがり屋さんなので、いつもオレたちは黙つたまま学校へと向かつているのだ。

無言。

やはり無言。

どうやつても無言。

うむ…やはり今日も香美は一言も言葉を交わさない。

一年ほど前から、オレは香美と一緒に登校している。

しかし、その間に交わした言葉は…

…ええと、なんだったか。

あ…確かあれは春だったはずだ…

「ゆ…祐季君…」

その日は春休み開けで久しぶりに香美の顔を見た。

「ん？どうした？」

「さ…さく…」

「さく？」

「さ…桜…」

「ああ、桜か。今年はよく咲いてるよな。もう散る時期だったのにまだ満開だし」

「……」

「ああそうだ。今度弁当作って花見に行こう。親父たちも帰って来たわけだし」

「……」

「ってなわけだからさ。もしよかったら香美も来ないか？って香美？」

香美は下を向いて黙っていた。道路に何か落ちているというわけでもなく、何故か下を向いていた。

「……………」

「あ、あの？香美さん？」

しばらくの沈黙。

そしてその後、

「……ばか」

と一言残して去っていかれた。

結局翌日からは何事もなかったかのように二人で登校したわけだが。

それが腑に落ちず、その事を鈴鹿に話してみると

「それは兄さんが悪いです」

とまで言われる始末。

「あれは一体何だったんだ…？」

まあ、分からないものは分からないのでもうこの問題は忘れる事としよう。

それにほら、もういつの間にか学校前に来てるし。

「それじゃあ香美。また帰りな」

「…うん」

いつも通り、帰りに会う約束をして校門で別れた。

教室の男連中に挨拶をしながら自分の席に腰掛ける。
と、

「よう。雁宮」

こちらでも聞き慣れた親しい声を聞いた。

「どうしたんだ晋吾。朝から機嫌良さそうじゃないか」

「ああ、いつも誰かと話している雁宮が今日は珍しく一人でいるから、嬉しいって訳」

晋吾は実に楽しげにしている。

「そうか。じゃあ永遠にさよならだ」

しかし晋吾は悪びれる様子を微塵も見せない。

「そう言うなって。お詫びに朝イチの新鮮ニュースをお届けしてやるから」

「む、まあいいだろう。言ってみろ」

「待つてました。そんじゃまずは予備知識から。最近この町で変な事件が起きてるのは知ってるな？」 「変な事件って…あの昏睡事件のことか？」

確か夜道を歩いていたら正体不明の人物から襲われて、一週間ぐらい目を覚まさないらしい。

「そう、それ。で、その犯人を見たつてのがオレの友達にいてな」

「前置きはいいいから教えろよ、それで犯人はどんなやつなんだ？」

「けっ、少しぐらい聞いてくれてもいいじゃねえか」

「それは悪かった。で、犯人は？」

晋吾はますます不服そうな表情になったが、

「わかったよ。俺の負けだ」

どうやら折れてくれたようだ。

「つたく、お前は昔から自分の興味あることには容赦しないんだな」

大袈裟に溜め息なんぞつきながら晋吾は言う。

「悪かったな。昔からなんだからしょうがないだろ」

「ああ、そうだな。これ以上は身が持たなそうだから要点だけか
いつまむぞ」

オレは頷く。

「よし。犯人は人間以外の生物！これで間違いなし！」

「…は？」

晋吾は周りの目を憚る事なく声を張り上げた。

周囲からの視線が痛い、ここは晋吾に訊かねばなるまい。

「晋吾、お前」

「おっと。文句は受け付けないぜ。オレは聞いたままを話しただけだ」

じゃーと言って晋吾は自らの席に戻っていった。

「化け物が事件の犯人って、都市伝説もいい所じゃないか」
なんて悪態をつきながら背持たれに体を、

紅い部屋。

身体が欠けた家族。

喰われた左腕。

血が無くなっていく。

体温が下がっていく。

化け物がこつちを見て笑っている。

死に、たく、ない。

死にたく、ない。

死にたくない。

死にたくない！

「……ッ！」

…なんだ。さっきのは。

…朝の夢の続きでも想像してしまったんだろうか。

…吐き気がする。

あんな血の海を見て吐き気がしない人間はいない。

いくら夢とは言っても、リアルに思い浮かべば現実に匹敵する物にもなりかねない。

「アホらしい……」

こういう日は身体を動かすのに限る。幸いなことに一時間目は体育だ。思いつ切り動いて忘れよう。

other view

今日は朝から憂鬱だ。

だって、一時間目から体育なんて、残りの五時間はどうやって過ごせと言つのだろう……

…というわけで、今私はグラウンドの隅で膝を抱えている。

別に取り立てて体育が苦手な訳でもない、ただ一時間目というのはいかななものか、というのが私の見解。

だから私はこうして二クラス合同体育の数少ない見学者として、授業に参加している。

今日の種目は走り高跳びのようだ。男子は張り切って女子では跳べないような高さに設定している。

と言うか女子はこう、体の都合と言うか、そういった物の関係でこういう種目は恥ずかしくてあまりやりたくない。

こうやって一人で物思いにふけていると、一人の男子が助走準備に入った。

「頑張れー雁宮ー」

応援しているのかしていないのか、気合いの入っていない歓声を背に受けながら、彼は走り、跳んだ。

「……！」

その瞬間。確かに彼から感じた。

「あの男、やはりそうだったか」

その声は遠雷のように重く、暗い声だった。

地の底から這い出て来るような威圧感のある声は、私の中から響いている。

「学校では喋らないで」

「確かにそう約束はしたが、お前はわかっているのか？あの男に近寄り過ぎて情が移ったなどと言つのではあるまいな？」

「……」

「情が移るのは仕方がないが…もしもという事がある。緊急時の心構えを忘れるな」

「…わかってる」

そう言つたその答えに満足したのか、もう声は話しかけて来なかった。

チャイムが鳴る。

せつかくの彼の姿を見れるチャンスだったのに、一体どうしてくれるんだろ…

第7話

「ふう…」

一時間目終了のチャイムが鳴った。

道具の近くに居た奴等が各々軽い感じで片付けていく。

うん。やっぱり運動はいい。やってる間は嫌な事を思い出さなくて済むし、終わった後の爽快感は何物にも代えがたい。

「よう。また会ったな雁宮」

この男のせいで完全に消え去ってしまったが。

「全く、親友が喜んでいる時はその要因を訊くのが筋ってもんだろっ？なあ友よ」

「なあ友よ、どうしてお前は空気を読めないのか」

「ああ？そんなの簡単じゃねえか」

晋吾はドンと胸を叩いて、

「そういう風に出来てるんだからな！」

そう高々と宣言した。

「そうか、じゃあ仕方ないな」

冷たく言い放ってグラウンドを後に

「ちよつと待った雁宮！」

しようとしたオレの名を呼ぶ声。

一瞬晋吾かとも思ったが、そういえば晋吾は後ろの方で何やら雄叫びを上げているようだから違う。

よって犯人の心当たりは一つに絞られたわけで…

「今日こそ我らが野球部に…」

「相撲部に…」

「陸上部に…」

「悪い。オレはこの程度の運動で十分だ」

いつもの部活動誘組を一蹴して、今度こそグラウンドを後にした。

「オレはやっぱり力うどんのネーミングセンスはどうかと思うんだが」

「それだったらまずはたぬきうどんを気にしないか？」

とお互いに相手のうどんを罵りながらお互いに自分のうどんを口に運んでいるオレ達は学食にいる。

「昼休みは学食行こうぜ。たまには弁当じゃないのも新鮮だぞ？」と晋吾の一計に頷き、ここまでやってきたのだ。

「でよ、お前がどんな魔法を使ったのかが気になるのよ」

思わず飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。

「ん？どうした？」

「…いや、なんでもない。それで魔法ってのはなんなんだ」

そう、よく落ち着いて考えればこいつが魔術や魔法の存在を知っているはずがない。

確かに一時間目の体育で思わず足に魔力を集めてほんの少し高く跳び過ぎたかもしれないが、決してそれは魔法なんかではない。

むしろ慌てた方が逆に怪しまれるだろう。

「なんだは無いだろ。お前高跳びで陸上部顔負けの跳躍見せたの忘れたのかよ」

やはり朝の体育の時の事を言っているらしい。

「ああ、あのジャンプは偶然だ。魔法でもなんでもない」

「…ったく、こういうことがあると絶対お前はなんとか言って誤魔化すよな。いいよ、昔からのよしみでこれ以上は詮索しない。」

「悪いな晋吾、話せる時が来たら話すから、それまで我慢してくれ」

多分一生活す事はないだろうが…

「いいって。俺だってお前に話せないような秘密はいくらでも持つてるからよ」

「サンキュ。そんじゃそろそろ教室に戻るか」

「だな。って次英語じゃねえか、サバろつかないってアレ？」

「…？どうした？」

晋吾は学食の入口を見たまま止まっている。

そして笑って手を振ると、オレを何かに差し出すように突き飛ばした。

「ッ！いきなり何を……！」 「兄さん」

それは忘れていた現実を思い出させる恐ろしい声だった。

澄んだ可憐な声もこれでは逆に恐怖を煽るだけで、まるで天使の皮を被った断頭者に尋問されている気分になる。

「や、やあ……鈴鹿。もうすぐ授業だから教室に」

「兄さん。話す時は人の顔を見ないといけないってお父さんに言われましたよね？」

「そうだな！そうだった！」

くそ、晋吾はニヤニヤと笑いながらこっちを見ているだけで助ける気は微塵もないようだ。

今鈴鹿をやり過ごしても家に帰ればまた会ってしまうわけだし……

……しょうがない。腹を括ろう。

「鈴鹿。朝はすまなかった。今度からは本当に気をつけるから今回だけは本当に」

ただ長い謝罪の文を述べながら鈴鹿の方に向き直る。
すると鈴鹿は、

「あ……」

極上の笑顔で笑っていた。

「兄さん」

鈴鹿は思いつ切り息を吸い込み。

「なんで学校に来たんですか……！！！！！！」

回りの目を憚らず。

「そもそも兄さんは自分の体を労らなさ過ぎなんです！」

大声でオレに説教を始めた。

「鈴鹿。あの。ここは人が多いからせめて人がいない所に」

「ダメです！兄さんは死んじゃってもいいんですか！」

ああ、腹を括ったつもりだったけど、覚悟が甘かったらしい。

昼休みが終わるまであと五分。それまではこうして兄の事を心配
してくれている妹の説教を聞いていることとしよう。

第8話

キンコンカンコン

五分間という無限地獄に陥っていた時、その音は突然頭上より鳴り響いた。

チャイムが福音に聞こえたのはきっと今日が初めての事だっただろう。

とにかく助かった。

鈴鹿は明らかに言い足りない、みたいな顔で食堂を後にしていったし、これでしばらくの間は身の安全は保障される事だろう。

「さて、それじゃあ教室に…」

戻るか、という言葉は喉の奥で止まった。時計が指し示す時刻は、とつくに授業開始を過ぎていた。

その後、遅れて教室に入ると、

「おお？優等生の祐季君は遅刻ですか」

なんて晋吾に冷やかされるし散々だ。

唯一の救いと言えば、いつもと同じように帰りの校門で香美が待っていてくれた事ぐらいか。

「祐季…君」

いつものように気の弱そうな香美。

「どうした？」

「その…今朝の…ニュース見た？」

…そういや今朝は家を飛び出してきたからニュースなんて見てる暇無かったな。

「悪い。今日に限って見て無い。どんなニュースだったんだ？」

「ん…見て、ないなら…いい」

香美は視線を逸らす。

ん？なんだろう。

いつもは表情の変化が無い香美が心なしか怒っているような…

「香美。怒ってるのか？」

「怒って…ない」 本人はそう言っているが、一度そう見えてしまつと怒っているとしか見えなくなってしまう。

「香美。本当に怒ってないのか？」 「…怒ってなんか…ない。

ただ…呆れ…てる」

…呆れてる？

確かに怒つてると言うよりは呆れている…のか？

けどなんでオレが呆れられなければならないのだろう。

「なんだそれ。呆れるって」

「…呆れは…呆れ」

「いやまあ、そうだけどさ…」

…朝のニュースを見てないだけなのにここまでご立腹とは、相当そのニュースは香美の興味をそそる物だったらしい。

「その…すまなかつた香美。明日からちゃんと朝のニュースを見るようにするから今日は許してくれないか」

「あ…謝らなくて…いい」

「いや、毎朝見ているニュースを見なかったのはオレの責任だし、謝らないと気が済まない」

「だから…謝らなくて…」

「じゃあ謝らないから、別の事で償わせてくれ」

「別の…事」

「ああ、なんだっていいぞ。一日俺を使いまくってもらっても構わないし、なんだっていい」

「……」

こちらに非があるなら、まあこれぐらいの罰は受けたって構わないだろ。 「…君の…に」

…え？

今何か、とてつもなく失念していた事を言われた気がする。

「…香美。今何て？」

「…祐季君の…家に…行きたい」

「オレの…家？」

無言で頷く香美。

「兄さん」

そして脳裏に鈴鹿のあの笑顔が浮かんた。

「…祐季…君？」

香美の声で我に返る。

「あ、ああ。その事なんだがな、悪いけど諦めて…」

と言おうとしたが、言えなかった。だって、

「くれなくていい。ただ今日はオレが晩飯を作らないといけなから買物に付き合ってくれ」

あんな心配そうな表情されてたら、断るにも断れないじゃないか

…！

「メシも食って行くんだろ？」

「あ…うん」

トテトと香美は付いて来る。

さて、香美は魚は大丈夫だろうか。もしダメならメニューは最初から考え直しをしなくては。

「香美。魚はダメか？」

「…大丈夫」

「そうか。それじゃあ」

それじゃあ、お客様という事で秋刀魚は明日。

今日の夕飯は鮭のムニエルで行こう。

2nd other

さて、こうして私、香美梨沙は彼の家に夕飯を頂きに行く運びになった。

厳密に言うなら、らしい。を着けた方がいいかもしれない。

別に私は本来の目的を果たせればそれでよかったのだけど、

「香美。メシ食って行くんだろ？」

そんな楽観的なのか、それとも何か罫を仕掛けているのかよく分からない誘われ方に乗ってしまった訳である。

なんでこんな事になったのかは分からない。ただ、私を誘った時の彼の目は、悪意の欠片も無かったというか、ただ善意のみで私を誘ったというか、要は本当の私の事なんてなーんにも考えてないただの少年だったのだ。

ただほんのちょっとだけ、赤子の爪の垢ほどにもないけど、罪悪感はある。

そりゃあ彼の家に妹がいるのは知ってるし、親が不在だということも知っている。

そんな所に年頃の乙女が遊びに来るというのは少しばかり心臓に悪いのかもしれない。悪いのかもしれないけど、男なら一度頷いたのなら最後まで責任を持ってもらうつもりだ。

：そんな彼は私の隣で無口なまま歩いている。無口なのはいつものことだけど、今日はちよつとばかり様子が違う。

きっと緊張しているのだと思う。なんていったって、彼は女の子が苦手なのだから。

その片鱗は私が常に見てきているのだから間違いはない。

さすがに話しかけた時に赤面していたり、髪の毛をかき上げたら視線を反らしたり、そんな状態で追い討ちをかけるように声をかけると苦しい言い訳で逃げていればそれは悟られて当然。

無下に扱われているように感じなくは無いけど、それは彼の拒否

行動が上手ではないだけだから余計に始末に負えない。

前途多難だな…

声に出さずにぼやく。

と言いか何が前途多難なんだろう。自分でも分からないような事をぼやくなんてどうにかしてしまったのかもしれない。

というか一体何で私はこんな事で悩んでいるのだろう。今は少しでも不測の事態に備えるために集中を…

「梨沙、これは作戦か？それともただ飯を頂戴するために赴くのか、はつきりしてもらいたい」

集中集中…

「梨沙。聞いているのか？」

ほら、そういえば昔の人も言ってた、心頭滅却すれば、火も涼しいって。

だからこんなのは幻聴。

私は更なる深みに…

「梨沙！」 本日登場二度目の声はしつこく食い下がってくる。どうやらこの爺さんは私の行動方針に口出しするのが趣味らしい。そうに違いない。

私はそれに頭の中で答える。

「別に、どっちでもいいわ」

「な…！」

あ、驚いてる驚いてる。

「梨沙！何を呆けた事を」

「別に呆けてないわよ。ただ敵になるかもしれないから、偵察に行くだけ、そこでご飯貰えそうだから貰っておく、ただそれだけよ」

「しかし…」 ああもう！

この爺さん。知識だけは異常に蓄えてる癖にこういった場面では駄々を捏ねるような発言しかないとは…

ここは本当に、本っ当に不本意だけど、口で言い負かすしかないようだ。

「あ、わかった。さてはご飯が食べれる私に嫉妬してるんだ」

「な、何を言い出す！」

ありゃ？これは案外核心を突いたのかも。

なんとか笑いが零れそうになるのを押さえる。

「…どうした香美？下向いて震えて何してんだ？」

「え…？」

…どうも隣の奴にはバレそうになっているらしい。

「な…なんでも…ない」

「…そうか」

こうしてまた無言で歩き出す。

内面ではそうもいかないけど。

「でもしょうがないよね、私に宿っている限りは反転しないと感覚が伝わらない訳だし、そりゃあ嫉妬しちゃうのも頷けるわ。だって、ご飯って美味しいもの」

「う…ぐ」 おー、どうやらモロに凶星だったらしい。

ここまで分かりやすい反応をされるとなんだかもっとイジリたくなってきた。

「そんなにショックだったの？情けないわね、それでも北欧の神？」

「ぬう…！」

「神様がこんな一般人を手玉に出来ないなんて聞いたら皆哀しむでしょうね」

なんでこの爺さんはこんなにからかい甲斐があるのだろう。きっと生前でもこうだったに違いない。

あー楽しい。

と、あんまり人聞きの良くない事を思っていると、さっきまで黙っていた老人が反撃に出た。

「…お前のどこが一般人だと言っんだ」

相当不機嫌なようで、明らかに声に怒りがこもっている。

だけど、何か反論したかと思えば人の揚げ足を取るだけとは、神様もここまで来ると情けないとしか言い様がない。

自意識過剰な老人にお灸を据えるのも若者の仕事のはず。

「ええ、確かに私は一般人じゃないわね。でもそれだけよ、あんな力を使えたところで所詮中身は人間でしかないんだから」

「……ッ！」

その言葉は相当効いたのか、息を飲む声が聞こえる。

勝った。これは確実に勝った。

思わずガツポーズをとってしまいそうになったけど、そういえば隣にはこちらの事情を知らない準一般人がいるんだった。自粛しておこう。

だが、挑戦者は9カウントで立ち上がった。しかも満身創痍のくせに憎み口なんて叩いている。

「先祖返りさえ…成功していればこんな事には…」

まだ言うかこの爺さんは。

いい加減うつとおしくなってきたので、一気に畳み掛けよう。

「そんなの仮定の話でしょ？現に失敗しちゃったんだから現実見なさい」

「……」

立ち上がったのも束の間、私は無慈悲に顔面ストレートで、今度こそ完全に挑戦者を沈黙させた。

全く、せつかく二人での帰り道なんだから、もう少し気を利かせてもらってもいいんじゃないだろうか。

せめてバッグを持って後ろから着いて来るとか。

あ、肉体がないから無理か。

それに姿が見えないからこんなにかえるのであつて、もしヨボヨボのお爺さんだったらからかっているこっちが気分悪い！

あ、まずい。顔が引きつってる。

誰かに見られる前になんとかもみほぐす。

自分の中でのみで考える事は好きだ。

その中には数式とか論理とか、そういった現実な物もあれば、さつきみたいに白昼夢のような幻想なんかを想像するのも意外と悪くない。

こっぴどいのが癖みたいなのになってしまったのは、単に私の関わる事に想像力が必要とただだったから。

そう考えると、私は想像が好きなのでは無かったのかもしれない。ただ、好きになるしか、私には生きる道がなかったのだらう。だから、鍛えた。

元々身体能力は悪くは無かったし、その一点に絞って鍛えればさらに強くなれると指摘されたから、それを信じて鍛えた。

実際、私は成長した。

私に足りなかったのは、その一点だけだったのだ。

だが、後悔はある。

現に鍛えるために多くの事を諦めてきた。

それはまだ小さかった私には苦痛だった。何度も逃げて、何度も捕まった。

頭では分かっていた。

従えられなかったのは、きつと心。

でも、それでも私は強くならなければいけない理由があった。

だから、心を殺した。

そうまでして成さなければならぬ事。

それは…

…やっぱり止めよう。

今からご飯を食べに行くというのに、こんな事考えてたら作ってくれた人に失礼だ。

気が付けば少し彼から遅れていたので少し歩を速める。

…やはり無口な時間が過ぎる。

顔を盗み見ると、だいぶ緊張がほぐれているようだった。それにしても、暇になってきた。

爺さんは静かになったし、ここはこちらから話しかけ…

「香美。魚はダメか？」

間が悪い。

何が悪いかと言われると間が悪いのだけど、結局は彼が悪い。

…魚は、大丈夫だけど。

せめて夕陽が綺麗だと、言わせて欲しかった。

「…大丈夫」

…やっぱり彼は悪い。

女の子をこんな気分させるなんて、悪人以外の何者でもない。

あんまりキアラではないけど、拗ねてみる。

…そして、さっきからずっと気になっていて正体がわからなかった事が一つあったけど、その正体が今分かった。

なんで朝もさっきも、私は彼の姿を見ていたと思ったのだろう。

第9話（前書き）

時間を使ってこの程度の量と質…精進します。

第9話

帰り道に馴染みのスーパーに寄って、晩飯と明日の朝食の食材を買い込んでおいた。

「……ハア……ハア」

買い込むと言っても、鮭の切り身を三人分とサラダ用のトマト、スープと味噌汁両方使える玉葱。あとは食後の和菓子程度の軽い買い物でしかない。

「ハア……ツハア……」

それなのに何故こう、隣の香美さんは息を切らしてらっしゃるのか。

「あの……香美……？」

「……なに？」

香美は明らかに疲労している。いや、その理由は言わずとも知れていて、あえて今まで接触を避けてきた。けどさすがに息を切らして足を引きずるように歩いていけば無視をするのは少し難しい。

「その、それ持つよ」

そう言っただけで先ほど香美自身が自費で買っていた中身は謎の両手に携えた大きなビニール袋を指差す。

その大きさは何買ったたらこんなに膨れるのか分からない位に膨れていて、見るからに重い。

「大丈夫……」

いや、そんな事を額に汗滲ませながら言っても説得力は全く無いのだけど、否定した方がいいのかこれは。

「大丈夫じゃないだろ。さっきから汗かいてるし、息も上がってるじゃないか」

「……」

……香美は無言のままだ。

「まったく、意地張ったっていい事ないぞ。香美は女の子なんだか

ら、きつかったら俺に頼ってくれていい、だから荷物持たせてくれ」
要は、香美のような細い女の子に、例え自分の物と言えど荷物を
持たせている自分が嫌なのだ。

「……」

ここまで来るともはや意地らしい、香美は坂道にも関わらず、歩
くペースを上げた。

俺も遅れないようにペースを

「あ」

声は俺の前から聞こえてくる。というのはどういうことだろう。
目線を上げると、そこには夕陽を背負った香美がいて、その手に
は袋が一つしか握られていない。

香美の表情は逆光でよく分らない。ただ、その姿が美しかっ
た。

何故袋を一つしか持っていないのかなんてそれは些細な問題に過
ぎない。

無意識に、声をかけていた。

「香美……？」

「……逃……げて」

それは、何故、そんなことを口にするのか。

「香……みつ……！」

耐え切れなくなつて、もう一度名前を呼ぼうとして、顔面への強
い衝撃を受けた。

「あ……痛……う……」

一体何が起きたのか、重い衝撃は命に別状は無さそうなもの、
とにかく鼻が痛くて熱い。

「一体……何が……」

起きたんだ。とは言えなかった。

目の前に転がっている物に、ただ愕然とした。

「……香美。これは……？」

「……」

香美は答えない。

大量の塩飴を、眼下に望みながら。

…って、

「香美。早く拾おう」

とりあえず鼻の痛みを無視して手身近にある塩飴お徳用百円パツクを拾う。

「……」

ただ拾う。

「……」

拾う。

「……」

なんだか哀しくなってきた頃に全部拾い終わったので、香美に返す。

「……」

香美は俯いたまま飴を受け取った。

しかし、このまま香美に持たせるのは何か危ないと本能が訴えている。

「待った、香美。やっぱり俺が持つ」

「……」

香美はもうこれ以上無いくらい嫌そうな顔をした後。

「…持つて」

「了解しました」

俺に飴運搬係を命じた。

何故香美は塩飴を大量に購入しているのか、なんて事を考えていると、あっという間に家に着いていた。

…家の中からは人の気配がする。買い物をしてきた俺よりも鈴鹿

の帰りが早かったのだろう。

…昼休みは、まだよかった。

昼休みはまだ時間制限があつて、授業にも少し遅れただけで済んだ。

けど、今度は時間制限なんてない。もしかすると俺は明日学校に行けないハメになる可能性がある。

冗談ではなく、結構本気だったりする所が怖い。

「…何緊張してんだ」

そう、変に緊張するから怖く感じるのであつて、普断通りに挨拶すればきつと鈴鹿も朝の事は水に流してくれるだろう。

…深呼吸する。いつまでもここにいる訳にはいかない。

なら、もう覚悟を決めるしかない。

「ただいまー」

努めて普断通りに帰宅する。

「あ、お帰りなさい。兄さん」

鈴鹿は、何故か目の前にいた。

「あ…う…」

思わず面食らつて立ち尽くしてしまう。

「兄さん？どうかしたんですか？」

「…いや、なんでもない」

鈴鹿はいつも通りだ。

だけど今はその普通さがかえつて怖い訳で、なんかこのままじゃ明日は迎えられない気が…

喻え話だが、笑えないにも程がある。

「やっぱり具合が悪いんじゃない？」

「違う。そういう訳じゃないんだ」

「？」

…やはり鈴鹿はいつも通りの優しい鈴鹿だ。もしかすると朝の鈴鹿はどうにかしていて、適当な言い訳で逃げた俺に怒りでも感じたのかもしれない。

だとしても。いや、だからこそ俺は実際鈴鹿に心配をさせてしまった分、料理を作って、日頃の感謝を言葉と気持ちで伝えたい。

「鈴鹿」

「はい、なんでしょう？」

「その、すまなかった」

ただ素直に謝った。

鈴鹿はしばらくこつちを見て、再び笑顔に戻った。

その笑顔は、

「朝の事は怒ってませんよー」

、といった感じで俺に向けられている。　「鈴鹿：怒ってないのか？」

恐る恐る聞いてみる。

鈴鹿は笑顔を絶やさない。

「はい。お昼までは気にしてましたけど、怒鳴ったらスツキリしたみたいです。それに、朝兄さんが晩ご飯作ってくれるって言うたのを思い出して、お昼は軽く食べたのでお腹ぺこぺこです」

鈴鹿は胸を張ってどこか得意気にしている。鈴鹿は普通の子よりも体の発達がよくて量を多く食べるからその判断は辛いものだったに違いない。

「あ、ああ。そうだったのか。それは悪かった。それじゃ今からすぐ作るから…」

靴を脱ぎ玄関に入る。

ここで、今夜はお客様がいることをすっかりと忘れていた事に気付いた。

慌てて鈴鹿を呼び止める。

「鈴鹿待った。言い忘れてたことがあった」

「…言い忘れてたこと、ですか？」

「ああ、実はな。今日の晩飯にはお客様が来られる」

まだ外にいる香美を家の中に招き入れる。　香美は手に息を吹き

掛けて寒そうにしていた。後で暖かい飲み物を出してあげよう。

「隣のクラスの香美だ。ちょっと無口だけど仲良くしてやってくれ」

鈴鹿は初め、目を見開いてそのままだったが、しばらくすると、段々表情が厳しくなってきた。

う、また機嫌を損ねてしまった予感…

「そうですか」

それだけ言うと、鈴鹿は階段を上って、

「ご飯が出来たら呼んでください」

とだけ言い残していった。

「俺…何かしたかな？」

「…知らない」

その、女の子は難しい、と誰かが言っていたのを思い出した。全くその通りだと思う。

香美に熱いお茶を出して、料理に取り掛かる。

まずは鮭の切り身に塩こしょう。同時進行でスープとサラダ用の野菜を切っていく。

トントントン

台所に軽快なリズムが響く。

昔、まだ鈴鹿が料理を作れないくらい小さかった頃は毎日のように俺が料理を作っていた。親父はその頃から家をよく開けていたし、作らなければならぬ状況だったのだ。メニューは料理本の中から自分の実力に見合った物を選んでいた記憶がある。

しかも料理中に寂しがり屋な鈴鹿は俺に纏わりついていたら料理を焦がしてしまったりしたことは数え切れない。

それも数年前に鈴鹿が料理を教えて欲しい、と言い出してからは立場が逆転。鈴鹿は毎朝早起きして朝飯を作ってくれるようになった。なつたのだが、

最初はそりやもう酷かった。

毎朝の目覚ましは鈴鹿の悲鳴で、一階に下りるとコゲた臭いが充満していた。しばらく待っていると少し涙目の鈴鹿が焦げた卵焼きと、味が極端に薄い味噌汁を運んでくれた覚えがある。

それが最近では師匠でもある俺を抜くような成長を見せているから驚きだ。

「…つと、お湯が沸いたか」

あらかじめ火をいれておいた鍋にコンソメと玉葱、冷蔵庫にあったマッシュルームと人参を放りこむ。

今度はボウルを取り出して、適量の小麦粉を振る。その中に先程塩こしょうをした鮭を入れ、まんべんなく小麦粉をまぶしておく、フライパンを取り出して、バターを若干多めに溶かす。そこに鮭を重ねならないように乗せて、表面がこんがりとなるまで焼く。スーブは最後に塩こしょうで味を整えて完成。

あとは切っておいた野菜を盛るだけなのだが。

「香美。トマト大丈夫か？」

「……ん」

よし、鮭もいい感じで焦げ目がついたし、これで完成。サラダが添えてある皿に手早く鮭を盛る。

フライパンをさつと水洗いして、エプロンを外す。

皿を持ってキッチンから出ると、香美は何か難しそうな顔をして点けっ放しのテレビを見ていた。

内容はこの町からそう遠くない所で起きた殺人事件についてだった。

被害者は全て若い女性で、犯人は未だ不明。警察の捜査も難航しているらしい。

そのニュースの話題はそこで尽きたようで、今度は噂のUMAがどうかこうとか。そこまで聞いて、俺は二階へ向かった。

香美はまだ画面から目を離していない。

…まあ、鈴鹿を呼んできてから声をかければいいか。

熱々の夕飯が冷めないように、急いで二階への階段を上る。ドア

の前で、ノックをする。

「晩飯出来たぞー」

「あ、はい」

中からヒタヒタとフローリングを歩く音が聞こえてしばらく、普断着に着替えた鈴鹿が部屋から出てきた。

「お待たせしました。じゃあ行きましょう」

「よっし、絶対にうならせてやるからな」

ふふ…と鈴鹿は笑う。気品漂う微笑みだ。

その笑顔に目を奪われた。

ああ、でもこの様子じゃ機嫌はすっかり直ったようだ…

直ってなかった。

「いただきます」

「いただきます」

「…いただきます」

合掌を終え、今日はお客様を加えての賑やかな夕食に…なるはずだった。

「……」

カチャカチャ

「……」

カチャカチャ

「……」

気まずい。何でか知らないけど、空気がすごく息苦しい。

鈴鹿と香美。違うな、一方的に鈴鹿が陰悪ムードにして、香美はいつも通り、ゴーイングマイウェイ。

味付けを間違ったのだろうか？ いや、自分の舌に誤作動が無い限りこの味付けは欠点など皆無のはずだが…

「二人とも、もしかしておいしくなかったか？」

「……」

「……」

…俺、何かしたっけ？

「…ごちそうさま」

鈴鹿は早々に平らげ、皿を流しまで持っていくと、自分の部屋に戻ってしまった。

むう。せっかく買ってきた食後の和菓子はどうするか、香美と二人で食べるとますます嫌われそうだし、かといって大福は一日で硬くなるし…

「…私…帰る」

「…え？」

結構本気で悩んでいると、香美は鞆を持って立ち上がった。

「今日は…ありがとう。それじゃあ…」

てくてこと玄関に向かう香美。

「あ…送っていくよ」

さっきのニュースで近頃は夜出歩くのは危ないって言ってたし、そんな中を女の子一人で返すのは男として情けないといふかなんというか。

しかし香美の返事は、

「大丈夫…」

でこちらが靴を履き終わる前に出ていってしまった。走り回って姿を探してみるも、香美はおろか人一人として見つけれなかった。

諦めて家に帰る事にした。

住宅街を歩く。

俺の靴音だけが空しく響き、街灯の心許無い明りが揺れている。空気が、肌を裂くように痛い。それは、比喻でも何でもなく、間違はなく此処にある真実。

出てくる時は走っていたし、香美の心配ばかりしていたから気付かなかったけど、この町の静けさはおかしい。

町がおかしいのではなく、町の静けさがおかしいのだ。

結界、という魔術がある。

自己の一定範囲の世界そのものに及ぼす魔術で、簡単に言えば、世界を作り替える現象、自分の小さな世界を新たに創造し、独立させる。

効果は使い手によって異なり、その種類は千差万別。最も一般的なのが、結界内にいる自分の魔力を上昇させるというもの。

相当実力がある魔術師同士ならともかく、戦力差があまりに大きい場合に好んで使われる。ただ、結界内にいなければ効果は発動出来ないし、結界そのものを形成している魔力を上回る力には耐えられない。よって結界は主に魔術師自らのテリトリーに何年も歳月をかけ、完成させるものらしい。

ちなみに、ウチの場合は少し特例で、親父があんまり結界を創るのが上手ではなかったので、普通の一般警備会社にとりあえず侵入検知機をつけてもらっている。

親父曰く、

「現代で出来ない事はほとんど無いんだよ。ただお金を積むか、魔力で補うか、それだけの問題なんだ」

ウチの親父は金に糸目はつけない人なので迷う事無く前者を選んだのだが。

「はは…我が父ながら情けないな…」

…大きくずれてしまった。話を戻そう。

この町の静けさは、結界の仕業ではないかと睨んでいる。

家々には電気がついていても関わらず、人の気配がしない。

野良猫や野良犬、あまつさえは街灯に集まる虫の姿さえ見当たらない。

外界からの遮断。

それが、きつとこの結界の正体。

まあ、結界の正体が判明した所で俺のような半人前以下がどうにか出来るレベルじゃないし、親父が帰ってきた時に報告すれば手際よく片付けてくれるだろう。

…親父ああ見えてけっこう強いし。

さて、こんな所に長居しても意味は無い。さっさと帰ろう…

ギシッ、と。

一歩踏み出すと同時に、結界の空気が変わった。

「ッ！」

誰かが、戦っている。

結界の気質が荒々しいものに変わり、それは怒っているのだと感じ取れた。

大気が震える。

周囲の民家は全く変化がない。それも当然か、大魔術のような甚大なまでの魔力量でなければ、一般人は感じる事すら出来ないのだ。加えてこの結界、きつと道端で人が倒れていても、結界が解かれるまでは存在自体認識されないのだろう。

戦いは激化しているようだ。場所はここからそう遠くないのか、俺でも魔力の質程度なら分かる。どうやら戦いは純粹な魔力のぶつけ合いらしい。

「…見るだけなら」

見るだけなら、大丈夫なはずだ。

足は、魔力が迸る場所まで自然に動いていった。

第10話（前書き）

記念すべき10話目です。実際はもっと多いですけど、まあ本編は10話目なんです。

第10話

…現場が近い。

既に力勝負の産物であろう爆音は鼓膜のみでなく、肌にまで振動を伝えている。自分の魔力にしか慣れていない俺にとっては二酸化炭素濃度が濃い場所にいるようなもので、段々と足が重くなってきた。

「…ハア…いつになったら着くんだよ…」

思わず愚痴る。心の疲れは体の疲れであるけど、どうやらその逆もあるらしい。体が辛くなると心は卑屈になるみたいだ。

自嘲気味に笑いながら、角を右に曲がる。魔力の进りは一向に治まる気配がない。

右、正面、左、正面、右。

魔力を追って歩く。しかしいつまで歩けばいいのだろう。

もう足は棒のようだ。付いているだけで感覚はない。目眩がする。足はただ機械的に仕事をこなすための装置に成り下がってしまったかのよう。

「バカな事考えるな…！」

でももし、最初から自分の体が創り物だったら、創られた存在だったらどうなのだろう。

それ自体は最後まで自分が誰かに創られた存在だと知らず、種に分けられた群の中にいる一個体に擬態して一生を過ごすのだ。

何という道化。

喩えばそう、人間、既に存在している人間に擬態しなければ、何を考える事も、何をする事も出来ない。

ああ、でもそれはある意味。

生きる事だけに特化した。最高の創り物と言えるのではないか。

ガツンと頭に鈍い痛み。当然だ、電柱に頭を叩き付けて痛くないはずがない。

「俺は…」

何を、考えていたのか。

「趣味悪い夢だ…」

本当に夢なのだろうか、だって、足は今もこんなに重い

「ッ！」

ゴン、ゴン。

二度頭を叩き付ける。

一瞬意識が遠のきかけたが、あんな趣味の悪い幻想を忘れられるなら安いもんだ。

「行かないと…」

魔力の奔流は移動しており、目の前の曲がり角を右に曲がればもう現場のようだ。

力を振り絞る。魔力で体を強化しても構わないが、万が一にでも気付かれないとは限らない。気付かれたら最後。

「殺される…か」

動けなければ戦う力も無い。今の俺は蛇同士の喧嘩を覗き見る蛙よりも質が悪い。

ブロック塀に体を預け、覗き見る準備をする。心臓の鼓動がやけにうるさい。

ドクン、ドクン。

なんだよ、まるでこの先には行くなと警告しているみたいじゃないか。

ドクン、ドクン。

背骨に悪寒が走る。今度は心臓ではなく、本能が危険だと訴えている。

ドクン、ドクン。

ドクン、ドクン。

決意を固める。身を乗り出して、向こう側の世界を覗き見た

焦煙が立ち込めている。

焦げた臭いが鼻に纏りつく。それを無視して、意識を前に集中させる。

通路には、影が二つ、直立不動で向かい合っていた。

手前側の一つは、女のように、もう一つの奥側の影は、人間の男であるのだが……

「なんだあれ」

放つ気配、流れる魔力。いや、その立ち振る舞いさえも、その影を見れば見るだけその人間としての在りかたが全て不自然に感じる……簡単に考えるなら、あれは人間ではないのだろう。

人外の存在は決して珍しいものではない。

現に世間では霊だの妖怪だの、外国では宇宙人が、そういった存在を現実として受け入れてなくとも知っている。

最も近い物で言うのなら、宗教崇拜が当てはまる。キリストや、釈迦などが一般的に知られているが、そんな在るとも無いとも分からない存在に人生を捧げているのがその証拠だ。しかし、キリスト等の世界に知られているような有名な人物の実像は数少ない。

仮に実像を所持していたとしても、髪の毛一本や、爪の垢、とても本人とは呼べない。

だからこそ、偶像を使うのだ。

偶像とは自らの一部を使って造り上げるもう一人の自分。破綻している自己陶醉に他ならない。

そうやって陶醉の果てに造り上げられたのが俗に言う使い魔という存在。

使い魔とは基調にした生物の特徴を受け継ぐ。犬なら従順猫なら奔放、人間の使い魔は趣味が悪いのと扱いの難しさから従えている奴はそう多くないらしい。

目の前の男は、放つ気配や獲物への襲いかかり方、そして何より

漂う獣の気配が猫科なのだと伝えている。しかし、そこまで。

熟練したというか、きちんと基礎を学んでいる魔術師なら判別できるのだろうが、生憎俺はその基礎すら学んでいないのだ。ここま
で判別出来たのは幸運なのか、それとも悪運が強いのか。

…片方が分かったのなら、もう片方も正体を探ることに専念しよう。少しでも時間が惜しい、もし逃げられるにしても何か分かりやすい特徴を掴んでおかないといけない。

再び視線を前に戻す。

見たところ、手前の女はまだ若い。身長はあまり高くはないようだし、もしかすると俺と同じぐらいの歳なのかもしれない。

格好は全身黒。黒のコートに黒の編み上げブーツ、そして何よりも黒いのが、後頭部でポニーテールに纏めている黒髪だった。

その黒髪は、吸い込まれそうなほど黒く、逆に黒すぎるが故、近寄り難い。

冬の風が吹く。冷たい風に吹かれて黒髪が揺れた。

髪は風に舞うように遊ばれ、少女はそれを抑えようとしめない。

「」

その光景に何故、そこまで人を魅了する事が出来るのだろうか。風は吹いたまま、治まる気配が無い。二人はいまだお互いに黙ったまま向かい合っていた。

月が雲に隠れる。少女の姿がいつそう視認しにくくなると同時、

「はっ！」

一斉と共に、男の体が爆ぜた。

距離にして4メートルはあったであろう二人の間合いは、一瞬にして詰められた。男は少女に体重を乗せた蹴りを放つ。ドゴ、と鈍い音が聞こえる。

「くっ！」

少女は耐え切れずに道路に倒れた。そこを見逃さず男は少女の上に跨る。その手には、鋭く光る銀色の爪。

完璧だった。早すぎて爪の光陰がせめての道しるべだったが、ア

レは人間の太刀打ちできる物ではないと確信できた。

だからきつとあの少女も殺されてしまう。猫が鼠をいたぶるように、悪びれる様子もなく、ただ蹂躪された拳句に苦しんで殺されるのだ。

「あつけないな。転生体」

男が口を開く、いつでも殺せる余裕なのか、その声には先ほどの覇気がない。下の少女も一転して気配が変わった。殺されると理解しているのか、それとも何か別策があるのか。

「転生体とはいえど、奢り過ぎたな。使い魔ごときに押し倒されるようでは元になった英雄も浮かばれまい」

嘲笑を込めた言葉だ。こういう声は頭に響いて吐き気がする。

「さて、嘲りはこの程度にしておこう。本題だ。貴様の英雄は何か？北欧か、ケルトか、それともギリシヤか、答えろ」

先ほど消えた覇気が、凝縮して殺気になる。離れたところにいる俺にも感じ取れるほどの気配。目の前にしている少女には相当の重圧だろう。が、

「バカじゃない？」

圧倒的不利な立場の少女は、そんなことを口にした。

「な……」

「アンタね、そもそも強引に押し倒した相手が自分の秘密聞き出すうとしていて話すわけないでしょ。聞きたいのなら夕方ぐらいに家に訪ねてきなさい。まあ、正面から正々堂々戦って負けたのなら話は別だけどね」

…バカだ。あの少女は、本当にバカだ。

あんな状況で誰があんなことを言うと思像できるだろう。現にいつでも殺せる立場の相手だって、あまりに唐突だったから愕然としている。

「貴様……」

「あ、話が終わったのなら早くどいてくれない？アンタ重いのよ。それ以前にかよわい少女を押し倒しているところが他の人に見られ

たかどうかするつもりよ。あなた変態扱いよ。ああ、既に押し倒した
っていう紛れもない事実があるからとつくに変態さんね」

あいつは遠慮というものを知らないのだろうか。相手だってあそ
こまで言われて怒らないわけがない。あれじゃあ自ら死地に赴くよ
うなものじゃないか。

「…よからう」

男はゆらりと立ち上がった。殺気が膨れ上がる。目の前に倒れて
いる少女など、最初から眼中に無いように。

「いい、って変態扱いが？」

少女は明らかに楽しんでいる。というか言いすぎだろう。俺だっ
たら泣くぞ。

「ふん。事実と言うものはな、目撃者と当事者、二つの存在がな
ければならない。目撃者がいなければただの事故。当事者がいなか
ればただの幻覚。そして…」

「二人ともいなければ、最初から無かったことになる、と？」

「そういうことだ」

言うが早い、男は神速とも思える速度で爪を振り下ろした。し
かし少女は紙一重で爪をかわす。少女が居た場所の道路は、粉々に
砕かれ、深い爪痕がついていた。

「避けたか…」

男が身構える間に、少女は距離を図る。二人の間は4メートルほ
ど、最初の立ち位置とほぼ変わらない。これでは先ほどの二の舞で
はないか。

「避けなければ苦しまなかったものを」

「バカ言わないで。死ぬのよ？痛くないほうがおかしいでしょ。
無痛覚者じゃあるまいし」

「減らず口を……！」

男は最初の勢いをはるかに凌駕して襲い掛かる。一方の少女は徒
手空手、状況は先ほどからまだ悪化し続けている。

しかし、少女は不適に笑っていた。

全て、自らの手の平の上だとしても言うように。

「ヘルプリンディ」

「戦士の目をくらますもの」と、呟いた。

途端、爆発的に、周囲が明るくなった。閃光弾が爆発したような光景なのだろうが、何分俺の目も潰されたので周囲の状況がよく分からない。

「くっ！」

男の悲鳴が聞こえる。だが、既にそれは遅いのではないか。

「どこだ！どこにいる！」

風を切る音がする。きつと男が爪を振り回しているのだろう。

「私は、ここに居るわよ」

声は頭上から。どうやら男を見下ろす位置にいるらしい。錯乱している男は気づいていないようだ。

視界がぼんやりとだが、見えるようになった。

「出て来い！俺が殺してやる！」

「言われなくとも、ただし」

声がそこで途切れる。少女の姿を探すと、少女は、宙に跳んでいった。

「スヴィズル」

その言葉を皮切りに、

「フニカル フニカル」

詠唱とは違う、言葉を紡ぎだす。

「ビレイグ ヴィズル」

言葉に呼応して、少女の手の中に『何か』が生まれる。

「スヴィズニル」

その『何か』が徐々に形を成し、確実な物となっていく。

「シグフェズル ヴアルファズル…」

浮かび上がるは、無骨な槍。装飾も無ければ宝石も文様も無い。
ただの魔力の塊。

「ガグンラーズ…バーレイグ！」

少女は叫ぶ。完全に形に成った槍は、少女の手に握られ、火の粉を散らす。

「貴様あ！」

男は視力を取り戻し、地上で少女が落ちてくるのを待っていた。
それは当然、しかし、それが今最もってはならないような愚策であるような気がした。

少女は槍を振りかぶる。男は爪を奔らせる。

絶対的な速度の違い。男の爪は少女の肉に突き刺さる一歩手前で、
「ぐぎゃあああああ！！！！」

消滅したと見違えるほどに一瞬で、蒸発した。

男は蹲った。あまりの激痛と、先ほどまでとの少女の違いに絶望を感じて。

少女からはあまり多くの魔力を感じていなかった。

なのでこの英雄であるかを聞きだした後は、隠れ家に幽閉して
一生『玩具』^{おもちゃ}として遊んでやろうと考えていた。

それが、何故、どうして、ここまで牙を向くのか。

窮鼠猫を噛む。そんな言葉では話にならない。

自分が猫だとするなら、目の前の少女は獅子以上の存在だ。勝つ
も何も、勝負にすらなりはしないのだ。

逃げたい。本心で、そう思った。

生きたい。本心で、そう願った。

殺されたくない。本心で、そう祈った。

黒豹であつた誇りも外聞も全て投げ捨て、地面に額を擦り付けた
かった。

自分には養うべき家族がいると、そのために使い魔になったのだと、伝えたかった。

しかし、考える時間こそが無駄。

まずは、考えるより先に動くべきだったのだ。

何故なら、

「あ

少女の姿は、目の前に迫っていたのだから。

少女は重心を低く、槍の切っ先を真っ直ぐにこちらへ向けている。誇り高き獣だった男は、逃げようと背を向ける。

まずは家族に会いに行こう。そして、自分は帰ってこれないかもしれないと伝えよう。そうしたら、この転生体と存分に戦える。だから

「はあああああつっ！！！」

渾身の一闪。

踏み込み、突き出し、気合、どの一点にも迷いは無い。

空気を裂き、風を裂き、夜を裂き、槍は迷わずに心臓を目指す。

その時間は、一瞬でもあり永遠でもある。男の背中が遠い、しかし近い。

長い時間がかかり、遠かった背中に苦も無く、槍は突き刺さった。

槍は確実に、心臓を穿っている。

その一撃を受け、男の体は一瞬の痙攣の後。

「すまない

誰かに謝り、静かに絶命した。

槍が発火する。同時に、男の体は灰燼と化し、冬風と共に舞い、散った。

「…殺すのは、アンタじゃなくて私の方よ」

それが手向けの言葉だともいうように、少女は既にいない男へ伝え損ねていた言葉を漏らした。

第10話（後書き）

やっと書きたかったシーンを書けたような気がします。これからようやく話が進んでいきそうです。

第11話（前書き）

読んで下さっている方大変お待たせして申し訳ありませんでした。

第11話

事態はあまりにも呆気なくかたがついた。槍が男を貫くと同時に、男の体は灰となった。

ただそれだけ。

覚悟の違いなんてものじゃない。実力の問題ですらない。

あの少女とはレベル、いや、そもそもの存在意義、格となる存在の桁が違う。

最初から、男は勝てなかったのだ。しかも負け戦だと知らずに戦いを挑んだ。

けど、それは報われなさすぎる。確かに戦闘において、私情や感情は最も捨てなければならぬ枷だ。

けれども、せめて絶望を抱かせないように、命を奪えないのか。自分の言っていることは紛れもない偽善。こうやって自らのエゴをまき散らすのは命取りだとわかつている。

けど、俺は弱い。だから、そう願わずにはいられない。

才能は、然るべき者にしか宿らない。

ああ、だからきつと俺には魔術は扱えないのだろう。

割り切れた少女と割り切れない自分。力を与えられるのは、どう考えたって少女の方じゃないか

帰ろうと思いついたのは、それからしばらく経ってからだった。早く帰らないと鈴鹿が心配するし、夕飯の片付けもしていない。だから早く帰らないと

「……」

最後に、もう一度だけ少女の姿を眺める事にした。

何かわからないけど、とても大事な事を見落としていた気がする。塀から顔だけを覗かせた。

少女は何も変わらず、悠然と佇んでいる。いつの間にか、手に持っていたあの無骨な槍は消えていた。

あの焰の名残が、熱風が頬を掠めてゆく。

風が治まると、少女は塀に寄り掛かって、地面に腰を降ろした。

「ふう……」

少女はこちらからなんとか顔が見える距離にいる。しかし今は月が雲に隠れているので、鮮明にはわからない。

「使い魔とは言っても侮れないわね。まさか二つも英雄の歌を使うことになるなんて」

英雄の歌、というのは、多分あの謎の言葉のことだろう。あんな呪文は今まで聞いた事がない。短縮詠唱にしては鮮明に聞き取れたし、わからない部分が多過ぎる。

と、

「……梨沙。わざわざ使うほどの相手ではないのではなかったか？」
深い海から響くような。重い老人の声が聞こえた。

場所は少女のあたりから聞こえているが、少女は携帯を出した素振りもなく、座ったまま天を仰いでいる。

「冗談。女の子押し倒しておいて無傷で返す訳ないでしょ。正直あれでも足りないくらいよ。ここがヴァラスキヤルヴだったら間違いないく」

降霊術……ではない。

だとしたら、“ただの”魔術なのだろう。

“ただの”とは言っても、普通の魔術師には一生かかっても行使できないような技術を有するのだが、本人達にはそれが普通なのだから始末が悪い。

……その本人達とは目の前の少女や俺の親父等が含まれる。要は普

通の魔術師以下の俺が勝てるような相手ではないのだ。

こちらとしてはむざむざ死ぬつもりはないので、そろそろ撤退を…
堀から離れて、一歩踏み出した

パキ。

足下から乾いた音が聞こえた。頭上には道路に進出している柿の木。そして先程踏んだ物は多分木の枝だろう。

くそつ、マジかよ。

「梨沙」

「ええ、わかってるわ」

声の喝だけで、少女は再び先程の殺気を漲らせる。姿を見ていないのはせめてもの救いだったのかもしれない。直視していたら気絶ぐらいしていただろう。

カツカツと、固い足音が近付いて来た。逃げたい。ものすごく逃げたい。けど逃げたら殺される。この板挟みはどうしたものか。

「はい逃げない逃げない。逃げるにしても正体言いなさい。つかアンタまさか追っ手じゃないでしょうね？」

声は段々と近付いて来る。

声の比率は怒り40%、苛立ち40%、殺意20%と見た。釈放の余地なし。地獄へ真つ逆さまなんて冗談じゃない。座右の銘が『楽観主義』の俺はこんな所で死ぬ訳にはいかないのです。

人の死を悲しむ時はその時。生き残るための算段をする時はその時。割り切らなければ生きてなどいけないのだ。

「悪いが、俺はただこの辺りを通りかかったら偶然アンタ達がいだから見てしまっただけで」

「言い訳はいいわ。最初から見ていたのはわかってるから。それに、一般人がこの結界の中にどうやって入って来るって言うのよ。仮に入って来れたとしても、何にも知らないのならさっきの音が出た時に全力で逃げてるはず」

…どうやら敵さんは相当な場数を踏んでいらつしやるご様子。状況把握能力も大したもんだ。素人同然な俺に勝てる要素は万に一つも無いだろう。

「あー、その。嘘ついてすいませんでした」

「よろしい。アンタが敵の回し者じゃない限り殺しはしないから安心していいわよ。」 ……「ちょっと待てよ。殺し“は”ってなんだよ。まさか殺さない代わりに記憶の改竄とか、一生使い魔レベルの扱いを強いられるとかそんなんじゃないだろうな」

「あら、よくわかつてるじゃない。だったら話は早いわ。どっちがいい？」

こいつ…絶対性根腐ってる。うん間違いない。聞こえてくる声もどことなく喜々としてるし。

「じゃあ記憶の改竄で頼む」

こんな腐ったヤツの使い魔になるぐらいなら、ここしばらくの記憶を全力で道端にフルスローするのを選ぶに決まっている。

「……ふーん」

…ふーんはないだろ。ふーんは。

「なんだ。案外つまらない男だったのね」

いや…つまらないと言われましても。

「でも仕方ないかな。今まで感じる事すら出来なかった矮小な魔力量だし、自分じゃ奴隷に不十分な器だってわかつてるみたいだし」
人の痛い所をビシビシと突いてくる癖に、それが全て理に叶っているのは卑怯じゃないだろうか。というか奴隷って、扱い悪化してるし。

「はい。それじゃあ早い所片付けちゃうからこっち向いて」

しかしこの少女は全く気に止める様子も無い。ここまで無関心だと逆に傷つくのは何故だろう。

「梨沙、結界が破れるぞ」

と、助け船なのか、ただ間が悪いだけなのか、先程聞こえた老人の声が響いた。

「あつそ」

その警告を事もなさ気に一蹴する少女。 … いや、あつそつて、その程度で済ませられる事じゃないですね？

「……」

ほら、声の主も絶句してる。少女は慰めてやる様子皆無だし。

「そんな事はとづくに感付いてる。これから繊細な作業に取り掛かるんだから邪魔したら許さないわよ」

「……」

「返事は？」

「……はい」

うわ。かわいそう。

「さて、邪魔者が黙った所でさつさと終わらせましょ」

少女はゴニョゴニョと小声で何やら呟いている。布式も聞こえろし、何かの詠唱だろう。完成するまで今までの記憶に別れでも告げておくか。

「小僧」

やはり間が悪い。

この老人は空気というものを読めないのだろうか。

「… なんだよ。言っておくけど、俺は間違えても使い魔にはならないからな」

「誰もその事は言っておらん。ただ、貴様は魔術師なのか？」

「……？」

変な事を聞く爺さんだ。魔術師でなければ、こんな場所に入る事すら出来ないだろうに。

「当たり前だろ。魔術師じゃないとこんな所には来れない」

「ああ。だからこそだ。だから何故、お前みたいな存在がここにいる」

「なんだよそれ。だから俺は魔術師だから」

「では貴様。そんなあつてないような魔力量でどんな魔術が使えると言っただ？」

「！」

その言葉は、自分を誤魔化していた鎖を易々と引き契った。

「それは…身体の強化ぐらいなら」

「身体の強化？笑わせるな。そんな子供騙しが魔術なわけなからう」

「…聞きたくない。」

「そもそも。そんなものは意識せずに身を守るようにする護身術であり、目に見えない保険であろう。そんなものに意識を割いている時点で既にお前は失格だ」

「…そんなこと言われなくてもわかってる。」

「けど、それを聞くと自分が誤魔化せなくなる。」

「よく聞け小僧。貴様は魔術師等では無い。貴様はただの…」
「だから、もう止め」

「うるさいってのよ！」

と、少女の怒り狂った叫びが周囲に木霊した。

「詠唱、後少しだったのに…もう一度途中からか」

明らかに怒りが籠った声だ。俺悪くないぞ。悪いのは人のことを馬鹿にした姿を見せないご老体だ。

「今度こそ黙ってなさいよ。邪魔したら強制的に使い魔にしてやるから」

言い訳する間も与えず、冷たく言い放たれた。黙っていたほうがいいよな、うん。

「」

後ろから聞こえる小声での詠唱。その区切りごとに微小な魔力が積み重なる。紡ぎ、構築することに形を成す。

そして、

「Broken Eyes…（破壊の魔眼）」

唯一無二のその名。魔術の真名を呼び、魔術が完成した。

「さあ、始めるわよ」

俺はまだ少女の姿を見ていない。けど、背後には俺の肩ほどの高さ
に二つの魔力が存在している。

真名や魔力で察する限り、どうやら人工の魔眼の類らしい。

魔眼とは本来生まれつき在る才能のような物なのだが、才能ある
人物ならば身体強化を發展させ紛い物の範囲内においては絶対の実
力を発揮する代物を創り出せる。

それを、背後の少女は別段苦する訳でもなくやってのけた。既に
その時点で人間から軽々と逸脱している。なんかもう、ホント無
茶苦茶だな。

「…始めるって言うてるじゃない。早く向きなさいよ」

「いや、少し待ってくれ。ちよつと記憶に別れを」

さよなら数時間の自分。鈴鹿に怒られるのは正体不明のこの少女
のせいさ…

「ああもう！トロいわね！さつさとこつち向きなさい！」

「うおっ！？」

強引に肩を掴まれ振り向かされる。

「ちよつと！？」

しかし全く予期していない出来事に俺の体はついていくはずもな
く、振り向きながら倒れるという器用な芸当を実行しながら、俺は
少女を巻き込んで倒れた。

「痛…」

倒れる拍子に足首を捻ったようだ。思わず痛みに顔をしかめる。

「…アンタ、痛がつてる暇があるなら早くどきなさいよ」

少女の声は下から聞こえる。反射的に下を向いてしまった。

月明りが辺りを照らす。

結界で隔離された世界にもその光は届き、よりにもよって真正面から見据えている少女の顔を、淡く薄く照らし出す。

「あ」

「な」

声は全く同時。

しかし、それはむしろ必然であった。少女と俺。俺ら二人は既にお互いの顔を知っていたのだから。

「…香美」

香味は自慢だと言っていた黒髪をアスファルトに拡げ、馬乗りの状態の俺を呆然と見上げている。

「そつか…そうだったんだ」

声はやはり下から。香美は何を思ったか顎に手を当て、しばらくの思案のち。

「こんばんは。雁宮君。今日の月は綺麗ね」

と、いつもの香美からは信じられないほど饒舌にかつ満面の笑みで、場にそぐわない夜の挨拶を述べた。

第11話（後書き）

やっとヒロイン登場、と言った感じですね（笑）
これからまだまだ続きますが暖かい目で見守って頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2404b/>

輪廻転生

2010年10月28日07時06分発行